郵便

明治壬申八月

新聞 第十號

新貨三錢

東京横山町三丁目
太田金右衛門

特
門18
號 407
巻 2

凡例

遠近の人民互に性情よく相通じ事理よくお達するは新聞紙の如きは
都て故ふ西洋諸國苟も文明の名あるは地まても必ず新聞紙局は設
ありて國内國外を論ぜず凡百の務を網羅し保ぜて奇事異聞瑣
話常談を采用して日ふ刊し夕ふ刻して傳布きほゆく幾んど家ごとふ
喻し戸ごとふ説くは概あれバ國人甚ごあれを便ずるとぞ今爰ふ郵便
は新報を刊行するも廣く遠近の及ぶ我ぜ大ひよ内外は情を通し善
古今は変を知しめ以て世ふ裨益あふんこ我欲するあり蓋し瓶水の
氷は見て天下は寒を知るごとれバは小冊子を見るもの亦當今の情の
一斑を窺ふべし

郵便報知新聞第十一號 明治五壬申八月

○敦賀縣ヨリ報知港税關取建方伺書節略

當縣下敦賀港ノ儀ハ是マデ海口税一切取立申サズ右
ユヘ同港ヨリ近江エノ街道ノロト申処ニ番所ヲ設
ケ輸入出品ノ口銭ヲ取立来リ候処今般陸口ノ分ハ廢
シ海口ノ分ハ追テ輸出入取締方法御達相成候マデ先
従前ノ通取扱可申旨御布令之アリ候ニ付テハ道ノロ
ノ方ヲ廢シ敦賀港ノ方ニ更ニ税關ヲ設ケ輸入出品ノ
口銭取立候ヤウ仕ベキ哉云々

○島根縣より報知

出雲國島根郡大島村農与之助悴与助といふるは今年僅ニ八歳なれども身の丈四尺七寸餘あり且それ力量衆ニ勝れ為て徒ニ用立べしとて回縣より一ヶ月一依宛扶持米を附ふしたりしが尚引續き宛行ふべき哉

此旨伺ひ出ずべしとの事

○從四位有馬頼咸学校取立ノ願書大意

現石十分ノ一家禄下ニ賜リ難有奉戴仕候処弱質ニテ勉励洋行イタシ恩ニ報ルル能ハズ因テ願クハ右家禄ノ半高ヲ以テ小学舎ヲ設ケ西洋教師ヲ雇ヒ度云々

○宮城縣より報知

旧仙臺縣士族和田龍四郎同貫一郎の二人仇を報じたりしが杖九十閉門九十日の典刑に処せられたり其概略は貫一郎は叔父龍四郎は兄和田熊三郎といふる名取郡中田驛甚三郎といふる者の家にて両三輩酒宴を催きしが酔後剣道を論じ遂に安藤左工門といふ二人の中に熊三郎と挑合ひしに坐中の仲人にて為ん熊三郎は家に帰りしが再び甚三郎方へ立戻りしを見二人の悪徒熊三郎を殺しその場を脱去たり然して遂安は日下玄甫と改名し磐城國猪苗郡に有けれバ

就四郎兵衛一郎兵衛を務ね得て後離を遂ふとの
ど紙方帳の行術今よ尚知ふざれ

○濱松縣より報知大風雨ノ儀ニ付御屆大意

本月廿二日尋常ノ風雨ニ候処第七字頃ヨリ追々東風
烈敷第十字頃弥大風ト相成第三字頃東風戌亥ニ轉シ
一時路人通行モ難相成第六字頃ニシテ絶ニ風雨相歇
申候右ニ付海岸附ハ高浪ニテ波除堤切損シ込入相成
山里方ハ一時ノ急水田方水冠リ且畑方ハ木綿等開墾
中ノ折柄前書ノ次第ニ付成實モ如何可有之哉追々訴
出其他潰家等同様届出申候追々委細可申上候云々

○某人西洋物語略

國の強盛ハ人民よ由り人民の強盛ハ心よ由り心の強
盛ハ窮理を知るよ由る蓋し天文よ明かく風濤を逆
るときは航海難あかるべし重学を明らかにすれば一切の
奇器を造り浮べし電気を知れば万里の音信瞬間よ通
ずべし昔西洋各國とて窮理の未だ明らかざるときは
航海者遠く大洋よ出でず岸に傍て船を走すのみなり
今ハ数万里の海路も日を計て往来せり昔は鉏を以
て比を鉏きたりしが今ハ奇器を造り数十人の力よ代
へり昔は鎌もて穫りしが今は奇器ありて数十畝の稲

を刈るに昔の木棉は紡車に人手を加へて成りしが今は数千人の工に代る奇器あり昔々車に牛馬船に帆艫を用ひ甚だ遅行せしが今は蒸氣車船ありて其速あるに風に道さだかに昔は街上夜中黑暗なりしが今は燈を照し白晝の如し蓋し西洋古今の変此の如し然して尚求精止まる人智日に增し器械日に巧に赴むき窮理に心を用ゆる此のごとくして國の富強あるはなんぞ異むに足らんや

○一人の農夫或日市橋の邊に來り髮結床に立寄り髮を剪ましめしが剪み終りて去るに列り僅に二百文の錢を投じて去りぬ床の亭主ひろひ取る中に洩れ物を拾ひ得ざるかと二百文にて髮を剪むるの所の平定價の如く訪朱を出せと云けれバ農夫答へて我村里にては百文にて剪みたるを今二百文を出したるに尚ふ足を云ふ乎と大に憤りられバ亭主完ふとして云ふ様すべて價は手間の巧拙によりて多分の違ひあるものなり汝知らずや今吾國の医師に掛らば五分ら三分の効驗あるべし西洋渡來の名医にかゝらば一度の費拾圓ら上に及ぶべし然ども開化の人は能く其性命の至重を知り庸医を厭ふて名医に就く況も野鄙の窮乏を救ふ

て開化の都人を学ぶまた絶く今苦しき際を知るべし際の巧を知らんまゝ邪条の價あるも高志ゝはなるべきありと説くなり

○七月廿二日夜暴風雨の節岳営潰倒あて五番大隊死者四人傷者四十一人九番大隊傷者二十八人十三番大隊死者四人傷者七十六人右死傷の義達し

叡聞に深く悩然被　思召仰て死者に金二千匹宛傷者に金七百匹宛下し賜る尚診察として岩佐大侍医竹内権大侍医其兵営并軍医寮に彼差向候ゆ

○第五號に記載せし石川縣より報知書生紙廳へ建言

つさ士族議論を生じたるを記せしを今回縣より確報ありたるまゝ其大略を掲ぐ

私共儀金澤町に於て有志ヲ募り義塾取開キ漸々生徒相増シ候エドモ猶時ノ變遷ニ適シ百藝取開キ度志願ニテ心労イタシ候処今度國債文消ノタメ禄高十分一御引去ノ分御返シニ因リ右十分一ノ分差出シ費用ニ充テ尚同志ノモノヲ募リ申度就テハ士卒中有志ノ者右十分一ノ出金イタシ為替會社エ預ケ年々利金ヲ以テ財本トシ教育ノ道并自産ノ法相設ケ度志願ノ人数多ク之アリ最モ有志名薄御届申ベク候エトモ不取敢

此段奉願候云々

○同越筋巡廻ノ驛逓察官員より來書の略

新潟縣管下越後国岩舟郡蒲萄村の者ども先般の軍事中人足賃銭の儀より銀貨八右衛門ヘお掛りふ法の義有りて同村庄屋大瀧弥作代のり村上支廳ヘ呼出し紀弾中被仰渡ありしに付ては取扱ひ方の儀縣吏除しに不阿を問ふる義分の豆ありと云ふ伺の故なりと食ふやと義者れで答へて云ふ初めて役所の白洲より出る節役人を恐れず強力を強くする呪詛ありと云顔より逐答しかりとあり同縣伊羽大属の談話より無

心なりと聞くも可笑のみの奇運あれども又能く考ふるに我國民の官吏を怖れ縣廳を恭ふてその説を述べその情を尽す或は寃を含んで止むるの多かるべし甚歎息の至なりと

○福島縣より報知出水に儀に付御届

當縣管轄ノ郡村當年ハ順候ニテ諸作豊熟ニ可趣折柄本月廿二日徹夜烈風暴雨ニテ川々漲溢官自普請ノ堤防ヲ破壊流失シ田畑ヲ損シ或ハ押入候段追々届出候作毛ハ多分ノ障害無之哉ニ相聞エ候得共委細ハ實地取調追々可申上候云々

○筑摩縣より報ず

飛彈國大野郡高山上町酒造渡世吉木左傳なる者當春の頃より土蔵築造より去二月十三日の夜普信小路より出火ありて近隣数百戸焼失し罹りたる家々にて所持の諸類出けるハ全過失なりと申なれ罪科謝するよ遂に深く恐縮致し寛典の御所置をいてお願ひ段莫大の御仁恤と奉戴仕ハ就てハ今般焼跡の私所持不相當費拂ひ右代金をいて火災消防の器械を設一火消人足として迷ハ扞禦の御為有之ハ後来消防の一助ともなるべく旨縣廳へ申出より右さ

特の御付官より褒賞として金千匹を下し賜りし

○長崎表服部某より来る

昔者羅馬人の用ひたる日報は頗る今の新聞紙と彷彿せり然して英國よりて「ヘンリ」第六世の時より始り新聞記載の事付始めて行れり米國より千七百七年（我宝永四丁未）「ボストン」にて始めて行はれ佛國より千六百三十一年（我寛永八年辛未）より始めて行はれ日耳曼より千六百十五年（我元和元年乙卯）より始めて行れり然して千八百六十二年中（我文久二年壬戌）英領全部にて行はれる新聞

既に千百六十五種の多きに至りたり此今より到りて益〻
幾百種の多きを加へ〻爽〻盛大の事あるべきなり扨文政
の世より蓋有る洪大ふして又添重あるべし何卒我皇國より
も遍鄙の土地に至るまで人々これをもてなすべやう
ふあらんかと思ひ〻追々種〻の新文政を出
しあるより郵便報知新聞は驛逓寮の世話よりして普
く諸邦に行渡り互に親情を報知する其媒ちとなる
べきれば歓喜のいとまなる話一ずと云々

報知新聞第十一号 終

今般郵便報知新聞刊行の旨趣は遠く隔る國々の物情を互に通せしめ且府下
小生ずの細大なる實名地(相知らしめんと云依事を称て寄読ふ及申善行の賞嘉
暴徒逃捕縛撲滅度物の新巻の替帙絲織紡漆器陶器米穀菜茶其他の諸品製造
耕作の勉寡蠶豆漆雷風雨水火の災難暖氣候孰速ひまで少しく変り勉ふ
皆夫〻に筆記して聊文詞を飾を加へて時々載て是を送り發兌人及び賣
弘所小送り越し給ハん事伐希ふ

一郵便報知新聞一冊價新貨三錢毎月五号宛出板
當時發兌号ヨリ先キ廿冊分引受候向を一割引
同四十冊分ハ一割半引
一ヶ年分引請の向ハ二割引

右之通割合相定前金郵便賃共請取候上毎号發兌順序伐逐ひ郵便品にて届可申候

東京横山町三町目
發兌人　太田金右衛門